

利害認識と貿易自由化交渉: 絶対利得と相対利得

鈴木一敏

本稿では、国家をエージェントとして貿易自由化交渉の過程をシミュレートする。国家は貿易による利害を計算し、他国と交渉して貿易量を決定する。交渉は「交渉力」や「貿易からの利害」といった関数(市場の大きさや貿易依存度等に依存)に基づいて行われるものとする。

国家

- ・ 最適な貿易依存度を維持することでもっとも大きな利益。
 - ・ 市場規模が大きく貿易依存度が低い方が交渉力が強い。
- こうした国家が貿易量を交渉して決める世界を考える。

絶対利得と相対利得

絶対利得: 自国の利害だけを考える(ホモ・エコノミクス)

交渉…互いの利益であれば全て合意。

秩序…自由貿易?

相対利得: 自国の利害だけでなく他国との差も重視(ホモ・ポリティクス)

交渉…相手の利益が大きすぎると、双方に利益があっても合意しない。

秩序…重商主義? 保護貿易?

疑問

- ・ それぞれの利害認識を持った国家から、最終的にどのような秩序が構成されるのだろうか?
- ・ 利害認識の違う国家が同じ舞台に立ったとき、どちらが有利なのだろうか? どういう行動が自国の利益になるのだろうか?
- ・ どちらの利害認識に基づいた秩序が、より現実に近いといえるだろうか?